

卒業論文最終発表

中世の琵琶湖周辺平野部における

地形・水利形態が城館分布に及ぼした影響

2020.11.12

中谷研究室千年村研究ゼミ 齋藤拓 (1X17A053-1)

レジュメ構成

■論文の目次構成 ■序論、本論 ■図版出典、参考文献

論文の目次構成

【序論】

- 0-1.はじめに
- 0-2.研究目的
- 0-3.研究方法
- 0-4.既往研究、本研究の位置づけ

【本論】

第一章 琵琶湖周辺平野部の地質、地形

- 1-1.はじめに
- 1-2.地質
- 1-3.地形
 - 1-3-1.山地
 - 1-3-2.河川
 - 1-3-3.平野
- 1-4.小結

第二章 開発の展開と城館

- 2-1.はじめに
- 2-2.荘園地プロットの手法
- 2-3.荘園地プロットの立地変遷
- 2-4.城館プロット
- 2-5.小結

第三章 城館の成立背景

- 3-1.はじめに
- 3-2.荘園の成立
- 3-3.荘園の展開
- 3-4.荘園の解体
- 3-5.小結

第四章 資料：湖北平野の城館

- 4-1.はじめに
- 4-2.資料について
- 4-3.資料：城館カード
- 4-4.参考文献一覧
- 4-5.プロット地図
- 4-6.小結

第五章 湖北平野における地形・水利形態と城館

- 5-1.はじめに
- 5-2.山際に立地する城館
 - 5-2-1.広域の城館分布
 - 5-2-2.村落スケールの城館立地
- 5-3.平野に立地する城館
 - 5-3-1.広域の城館分布
 - 5-3-2.村落スケールの城館立地
- 5-4.小結

第六章 考察

- 6-1.はじめに
- 6-2.地形、水利形態と城館
- 6-3.城館分布を形成した歴史的背景

【結論】

【序論】

■研究背景

〈千年村〉研究ゼミでは、村落の特性を評価・分析し、長期的に持続する優れた生存立地を見いだす活動を行ってきた。長期にわたって持続する村落を調査すると、集落内や近接する山地に城館跡が存在することが多くある。城館を分析することで、村落の成立や集落構造に関して新たな視点を得ることができるとはならないかと考えた。



図 1 中世居館のイメージ

■研究目的

本論の目的は以下である。

中世、滋賀県の湖北平野において、地形・水利形態が城館の分布に及ぼした影響を明らかにする。それによって、中世において、地形・開発がどのように政治・共同体に影響を与えたのか明らかにする一助とする。

■研究方法

本研究では、滋賀県内の琵琶湖東北部に位置する湖北平野(滋賀県長浜市)の城館を対象とする。

理由として以下が挙げられる。

- ・北・東・南を山地、西を琵琶湖に囲まれた、地形的にまとまりのある地域である。
- ・氾濫平野、扇状地、後背湿地など地形的なバリエーションが豊富である。そのため、開発、水利の形態にも多くのバリエーションが見られる。
- ・近江の中でも城館が集中する地域である。

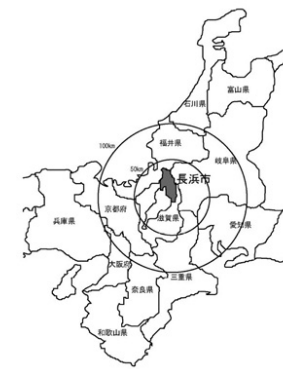


図 2 湖北平野の位置

- ①対象地域の地質、地形の特質についてまとめる〈第一章〉
- ②対象地域の城館の成立背景を見る〈第二章・第三章〉

③対象地域の地形・開発のバリエーションが城館分布に及ぼした影響を見る〈第四章・第五章〉

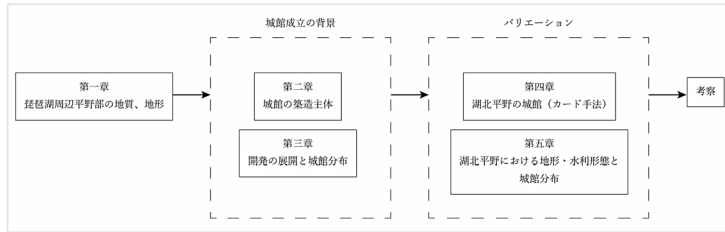


図 3 本論文の構成

■先行研究・本研究の位置づけ

都市史・建築史、および環境史・村落史において城館を扱った先行研究がある。

都市史・建築史研究においては主に社会制度・政治的背景と城館の関わりが言及されている。

・伊藤毅「境内と町」『年報都市史研究 1』(山川出版社、1993)

伊藤は中世の都市を空間的側面から「境内」と「町」の2類型に分類した。「境内」は中心核が存在し、それを中心とした同心円状の「面」を形成するものであるとする。一方「町」は原則的に中心核を持たず、道などの中軸によって組織される「線形」の中軸に沿って形成されるとする。「武士の館を中心核とする集合」についても、空間構成的には境内型に近いものであるとしている。

環境史・村落史においては平野における一部の土地条件について、地形・水利形態と城館の関わりが論じられている。

・佐野静代「平野部における中世居館と灌漑水利」『人文地理 51』(人文地理学会、1999)

前半において中世居館の分析視角を整理し、その中で水利・用水との関係の重要性を指摘する。さらに領主による水利開発において、開発と居館設置が連動していることを明らかにする。

伊藤の論においては分析対象が政治的・社会的条件に偏っている。佐野の論においては扱う立地条件のバリエーションが少ない。本論文では、**より多様な**地形・水利形態について城館分布との関係を比較・分析する。さらに立地条件に加え政治・社会条件をふまえて城館の多様性・バリエーションをみることでより広い視野で地形・水利形態と城館分布の関係性を明らかにすることを目的とする。

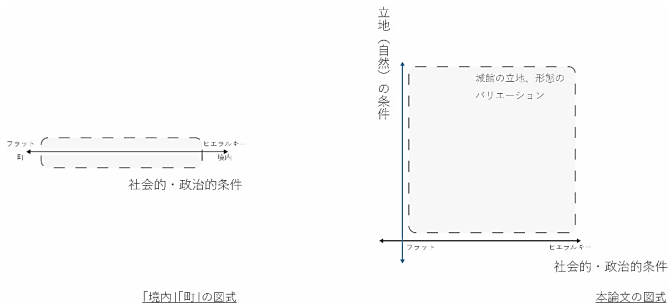


図 4 既往研究/本研究の図式

【本論】

第一章 琵琶湖周辺平野部の地質、地形

地質

地質学的には、西南日本内帯の美濃帯に属する。湖北地域の北東に存在する伊吹山地は、美濃帯の古生代石炭紀から中生代ジュラ紀にかけて堆積した丹波層群によって構成される石灰岩相と、泥岩や砂岩によって構成される砂岩頁岩相を主体とした山稜である。

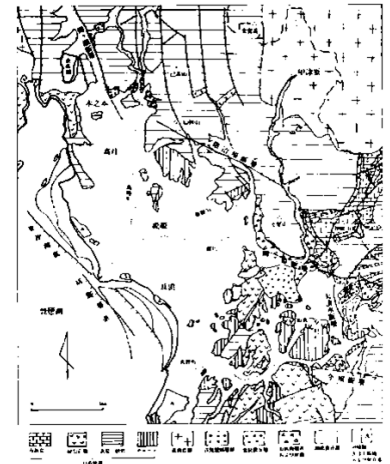


図 5 湖北平野の地質

地形

これらの山地を河川が浸食し、前面に扇状地を形成する。北から余呉川と高時川、東から姉川、天野川である。これらの河川は洪水のたびに流路を変え、広大な氾濫平野を形成した。河川の旧流路の間には砂礫層の微高地が形成された。また平野の中には虎御前山、雲雀山などの孤立山塊が見られる。これらは伊吹山地と一体の山稜群を形成していたが、地殻変動により沈下したものである。



図 6 湖北平野の土地条件/地形

平野は扇状地、氾濫平野、後背湿地などの土地条件で構成されている。扇状地端部、山際など湧水が豊富で農耕を行いやすい場所があるのに対して、扇状地中央部など農耕を行うには大規模な灌漑が必要な場所も存在する。

第二章 開発の展開と城館

第二章では、城館の成立背景について定量的な分析を行った。中世に利用されていた地域を知る上で指標となる荘園地プロットと城館プロットの比較を行い、城館と開発の関係を定量的に見いだした。

荘園編年プロットと城館プロットの重ね合わせ

城館の密度分布と、荘園の初出年代による編年プロット（荘園データベースによる。千年村ゼミの成果）の重ね合わせを行った。

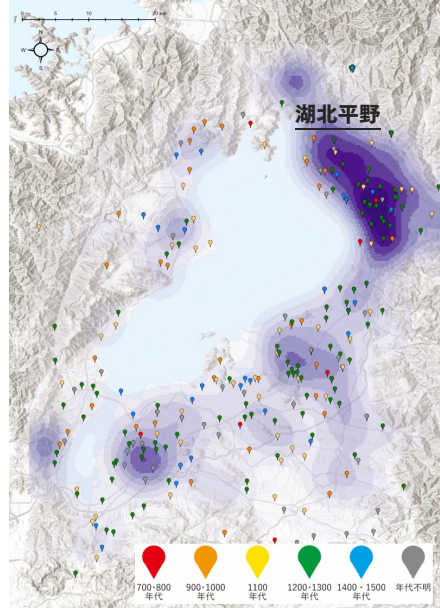


図 7 城館密度分布/荘園編年

1200/1300 年代の荘園が多い場所に、城館が集中していることが分かる。この年代は永原慶二『荘園』によると、荘園の「展開期」に位置づけられる。近江においては、扇状地など未開であった場所の開発が、大規模な灌漑によって一気に進んだ時代である。

限りある水の分配のため、政治的交渉の必要から、水利支配の拠点として城館が重要な役割を果たしていた可能性がある。

第三章 湖北平野における城館の成立背景

第三章では主に文献の調査を通して、城館の築造主体、土地支配制度の観点から城館と開発の関係を見た。

荘園制の中に組み込まれていた荘官、地頭などの在地の豪族が、中世に独立性を強め、荘園全体を実力で支配するようになっていった。彼らは荘域で用水の管理権を持ち、井堰・水路を整備、年貢の調整、種子などの配分を行うこと（勸農）で在地支配を強めていった。これらの人々が、開発・支配の拠点としたのが城館であった。さらに、農民の経済的発展を背景として、武士の末端身分を構成する者（村の小領主）、領主権力を排除して村の自治を行う者（惣村）が現れた。彼らも拠点とする村々に城館を築いた。

第四章 湖北平野の城館（カード手法）

第四章では、まず、『滋賀県中世城郭分布調査報告』『農業水利及土地調査書』『数値地図 25000（土地条件）』など湖北平野の城館とその周辺の環境を知る上で必要な資料についてその性格を明らかにした。さらに、湖北平野の城館について、情報を「立地（自然）の条件」「社会的・政治的条件」に分けて整理するとともに、環

境・立地条件を記した地図・航空写真に城館を重ね合わせた図を作成した。これらをカード形式にまとめ、情報を整理した。

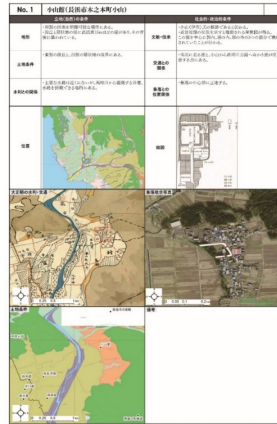


図 8 城館カード

第五章 湖北平野における地形・水利形態と城館分布

第五章では、湖北平野の城館について、山際、平野に立地するものに分類して広域の分布、村落スケールの立地を分析した。

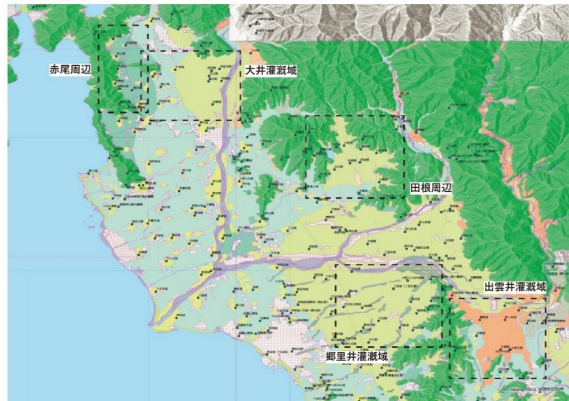


図 9 第五章の分析範囲

山際、平野に立地する城館に関して、共通する特徴が見られた。5-2、5-3 においてはそれぞれについて広域の城館分布、村落スケールの城館立地の特徴について述べた。

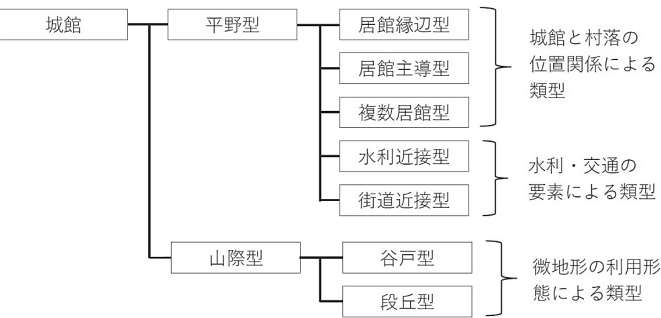


図 10 城館分布の類型化

山際型

城館分布の特徴としては、まず、山際の集落内にある居館が多い。これらは居館を中心に集落ごと城塞化されている。さらに集落の背後の山地には複数の山城が存在する。これは集落の周囲を見渡せる場所にある。1-2つの村落ごとに1つの山城がつくられていたと思われる。これらは敵の襲来を早く察知するための監視の場所であるとともに、非常時における村民の避難所にもなったと考えられる。

また、村がそれぞれ防御施設を持つことから、村が自立し、単立で防御や自治を担っていたと考えられる。

このような村の政治体制が行われた理由としては、水源の独立性が挙げられるだろう。山地からの湧水、個々の村落にあるため池によって他の村落と協力せずとも、自立して水を確保し、生活を営むことが可能であった。

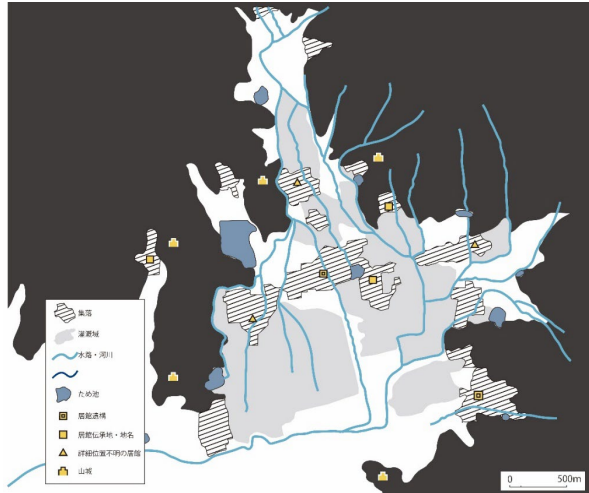


図 11 山際の城館分布（田根周辺）

平野型

平野部に立地する城館の特徴として、水利ネットワークと一体化した居館群が築かれていることが挙げられる。村落が相互に関連し、居館領主同士の社会的関係が城館の位置や規模に反映されている。これらの背景として、平野部では農業用水を確保するために大規模な灌漑が必要だったことがある。そのために複数の村落が連合して水利集団を形成し、水利集団が主体となって城館を築いたと考えられる。

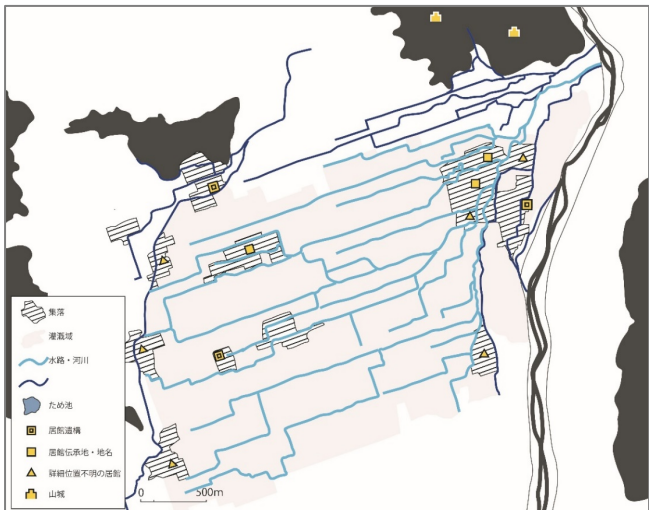


図 12 平野の城館分布（高時川大井灌漑域）

第六章 考察

第六章では、地形、水利形態が城館分布に及ぼす影響について考察した。広域な城館分布については、山際・平野において違いが見られ、地形が影響を与えていること、村落スケールにおいては複合的な条件の一つとして地形、水利形態が影響を与えていることを明らかにした。

さらに、これらの歴史的背景として「古代的土地利用」と「中世的開発」の段階があり、これらの経緯が城館の分布に反映されている可能性を指摘した。

◆古代的土地利用

古代から中世前期にかけて、人間が様々な土地条件から、農耕の可能な場所を見だし利用した段階である。山際における山地からの湧水を利用した農耕、平野における扇状地端部の湧水を利用した農耕などである。これらは一村を単位とした比較的小規模なものであっただろう。

◆中世的開発

人間が技術によって自然に手を加え、農耕を可能な場所に改変していく段階である。これらは主に平野部において起こった。

井堰を用いた水路ネットワークによる灌漑により、扇状地、段丘など開発のしにくい場所に農地が展開していった。

中世における展開

【平野】中世的開発が古代的土地利用の地域を飲み込むこと、中世的開発を行う水利集団が古代的土地利用を行う水利集団を服属させることが多く行われた。【山際】自己完結する水利システムを持っていたため、中世的開発の集団に組み込まれなかった。

戦乱への対応

中世末期、戦乱の多発する時代は平野、山際の地域両方に訪れた。

【山際】一村が自己完結した古代的土地利用を残す山際の村々は、村落を単位に自らの生活圏を守った。【平野】水利集団を単位とする中世的開発が大部分を占める平野の村々は、水利集団を単位に、集団全体の利権を守る方向に進んだ。水資源に限りがある中で、水利集団同士の交渉は必要不可欠である。交渉の代表者として力をつけた水利集団のリーダーは浅井氏、井口氏など史料に名が現れる有力武士となっていった。

図版出典、参考文献

- 【図版出典】
- 図 1 香川元太郎『KAGAWA-GALLERY 歴史館』<https://rekishi.kagawa5.jp/>（2020/11/10 閲覧）
- 図 2 長浜市『わたしたちの長浜』<https://www.city.nagahama.lg.jp>（2020/11/10 閲覧）
- 図 3 筆者作成
- 図 4 筆者作成
- 図 5 長浜市史編纂委員会『長浜市史 1』（長浜市、1996）
- 図 6 GoogleEarth, 国土地理院「地形地図 25000」を元に筆者作成
- 図 7 国立歴史民俗博物館『日本荘園データベース』滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査報告』1982 を元に筆者作成
- 図 8 筆者作成
- 図 9 筆者作成
- 図 10 筆者作成
- 図 11 滋賀県内務部『農業水利及土地調査書』に筆者加筆
- 図 12 高月町『高月町史 景観・文化財編 1』『高月町水利図』に筆者加筆
- 【参考文献】
- 佐野静代『平野部における中世居館と灌漑水利』『中近世の村落と水辺の環境史』2008 吉川弘文館
- 中井均『居館と村落—近江地域を中心とした分類の試み—』『研究調査報告—滋賀県立琵琶湖博物館』2004 滋賀県立琵琶湖博物館
- 『日本城郭大系』1980 新人物往來社
- 滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査報告』1982-
- 中井均『近畿の城郭』2014 戎光祥出版
- 高月町『高月町史 景観・文化財編』2006